



「ジュル……ジュル……チョコ……ウチユ」
「レロ……はむ……ん……こんなに……」
「こんなに大きく……なるんだね……」
「うん……それに、すっこい脈打ってる……」
二人掛りのフエラ。
それは俺にとって特別な時間。



次第にベニスは根元まで唾液まみれに。
舐め上げる舌は、まるで生き物の様に動き回る。

「気持ちいいですか？」

「んふふ…ピクピクしてる」

「もうイキたいんですね…いいですよ、いつでも」

「しゃぶって、すすって、また舐め回す。」

「徐々にそのスピードが上がっていく。」



「んっ……んん……ん……ん」
「キヤッ！」
目の前で飛び出た精液。
たつぷりと出たそれは、
サクラやヒナタにもかかった。

「ぐ……こんなに大きくて……カタいの……！
し……子宮の奥まで……当たって……！！
ハアッ……ん……ん……ん……っ」
もう成熟していると思つた身体は意外に柔らかく、
何より締めが良い。
膈内はもちろん、膈口をも使いベニスを
被う様に全体を締め付ける。



「イクウウウウッ……んはっく……うう……
凄じじゃない……こんなに……出るんだ……。
ハア……ハア……ハア……ハア……。
ねえ……もう一回……ダメ？」
ここまで強気だった彼女も、とうとう手の中に。
中には出したが、そのままもう一度出してやるか。



私利私欲の全てをぶつけ続けた後の
彼女は肩で呼吸をしながら黙って
難しい顔で何かを考えている。
激しく洗札を受け続けた体力は消耗し、
全身に至ってはザーメンにまみれている。
顔、胸はもちろんだが、膣内もまた当然。
白濁がよく似合う女になってきたのかもしれない。



どうもサクラの様子がおかしい。
大好きなペニスを挿入してやってるのに
喘ぎ声一つ上げやしない。
「……………」
ま、怒った顔も可愛いな。
徐々にピストンのスピードを上げていく。



何を怒っているのか知らないが、
身体は正直なものだ。
彼女のアソコからは次々と愛液が溢れて来る。
「……………っ！」
一気に突きまくってやると、
明らかに我慢しているせいか
小刻みに震えながら身悶える。



膣内に出しまくって大満足のペニスはもちろんだが、彼女のおマンコもまだヒクついて妙な気分になる。終わってもその表情を変えようとしないう態度を指摘すると、一言返って来る。「アンタ、テマリとシたでしょう」
「や、やばい……。」





中出しいっぱいしちゃったけど大丈夫かな？
でも気持ち良かったっ！
あなたのおチンチンが
おマンコの中でピクッ！ってなるの。



赤ちゃん……出来ちゃったけど今日もエッチしよっ！
いっっぱい腔内に出して、
ヌルヌルのおマンコをおチンチンでかき混ぜて！



ビク

ビク

ビク

ビク

びく

びく

「ふあ……アツ……あ……っ……
んもう……中に出しちゃったの？」
彼女は至って冷静だ。
溢れた精液は床へと滴り落ちる。
もう一度と言わず、何度でもシたくなる良い身体だな。

夢にまで見た見たサクラのおマンコ。
ピンクに色付く花弁はとても美しい。
早く挿入してその蜜の味を確かめたい。
甘いのか辛いのか……。
舌で、ペニスで、味わい尽くしたいものだ。



滴る程の肉欲をぶつけ続けた結果に、
私欲の欠片が膣口から溢れ出す。
何度中に出したのだろう……？
白く輝く濁った液体が
彼女の下半身を蝕んでいく。



「あ、ダメ……本当に……するの？
だって私……恥ずかしい……」
必死に堪えた表情を見せる。
何とも色っぽく、その姿に囚われる。





「ん……は、恥ずかしいよ……こんな格好……」
（内なるサクラ）「早く挿入なさいよーっ！」
「ダメッ……ね、もうやっぱ止めよ……」
（内なるサクラ）「そのおっきなおチンチンで
私のおマンコを滅茶苦茶にしてー！」

ギル

ズゴ

ズゴ

ギル

!!

ダメと言われるとつい
中出ししたくなってしまった。
この娘は本当に裏表の無い純で良い娘だ。





「ぐっ……ちよつと……大きい……よ……
んああ……全部入っちゃったね……」
素晴らしい後ろからの絶頂。
マンコのスジにペニスをはわせ、
ゆっくりと膣へと挿入する。
たっぶりの愛液でペニスを迎え入れると、
僅かだが確実にギュッと締め付ける。



「あ……ああ……つまんなにしないで……つ
おマンロが……壊れちゃー」
荒く乱れた呼吸で一心不乱に腰を振り回す。
激しいピストン運動に生の挿入はかなりキツイ。



「ハア……ハア……ハア……ハア……ッ」
ヤバイと思ってペニスを引き抜いた瞬間
はじけた水風船の様に一気に放出した。
「もっともっとして欲しいよお」
恥じらいながらも強請るヒナタ。
「お願い、おマンコにも出して……!!」
頷くと、まだ興奮冷め止まぬ脈打つペニスを
再度膣へと向かわせる。



「スゴイ……凄いよ……子宮まで届いてる……」
「ハンパじゃないヒタの数で再び俺を絶頂へと導く。」
「お願い……おマンコにいっぱい出して……」
「赤ちゃん……出来てもいいからあー」
彼女のリクエストに応えるのは簡単。
だってもう射精寸前。



「あっ！ああ……
ほら、奥でビュッビュッて……
うわ……あ……あ……」
ペニスを引き抜いた途端
精液が溢れ出る。
「あっ、見て、ほら……
精子が私のおマンコから
トロ〜っと出てきたよ」
ザーメンまみれの彼女の身体が
何ともエロくてたまらない。

「ほら見て、フワフワのおっぱい。
ねえ、キレイ？」
そんな事は答えるまでも無い。
黙ってズボンを下ろし、
彼女の前にペニスを突き立てる。





「やだ、おチンチンがもうバンバンだよ」
驚き慌てる、そんな顔がとても可愛い。
「そんなに激しくシゴいて……痛くないの？」
こんなシチュエーションは二度と無いかもしれない。
必死にシゴく手は止まるところか勢いを増す。

「いっぱい……出したね。」

あつ、ねえ……あなたのザーメン……

舐めてみてもいい？」

この後、ベニスから吐き出されたザーメンを

一滴残さず掬って、指で絡め取り味わい尽くした。

「今度は直接飲ませてね」

その言葉にまたいきり立つ。

